

第51回 記者懇談会実施概要

1 日 時 平成20年9月17日(水) 15時～

2 場 所 100周年記念会館 第2会議室

3 内 容

(1) 研究発表・質疑応答(15:00～16:00)

・多賀^{たが}太^{ふとし} 文学部准教授

発表テーマ「揺らぐ男のライフコース－男らしさの社会学的研究－」

・石垣^{いしがき}泰輔^{たいすけ} 環境都市工学部教授

発表テーマ「都市型水害による浸水時の避難困難度－避難体験実験による検討－」

(2) 学内状況説明・情報交換(16:00～17:00)

- ① 「『KU Vision 2008-2017』～学校法人関西大学の長期ビジョン(将来像)～」の策定について [資料1](#)
- ② 新たな教学ガバナンスへの移行について [資料2](#)
- ③ 大地震発生時の避難訓練実施について [資料3](#)
- ④ 第2回社会安全学連続セミナー「安全の学際的探求」の開催について [資料4](#)
- ⑤ 総合研究室棟竣工式の挙行について [資料5](#)
- ⑥ 春学期卒業式、学位記授与式および秋学期入学式の挙行について [資料6](#)
- ⑦ 渋沢栄一記念財団寄附講座「日中関係と東アジア」の開催について [資料7](#)
- ⑧ 関大生の活躍について [資料8](#)

4 大学側出席者

河田悌一学長、芝井敬司副学長、安部誠治副学長、良永康平学長補佐、川原哲夫学長課長、多賀太文学部准教授、石垣泰輔環境都市工学部教授、藤本清高広報室長、木田勝也広報課長 他

5 参考資料

- (1) 第1回社会安全シンポジウム「地域と社会の安全をめざして」 報告書
- (2) 東京センター「公開講座」『風景との出会い－近代の時空をめぐって－』 チラシ
- (3) 生涯学習吹田市民大学 関西大学講座(後期) パンフレット
- (4) 関西大学公開講座(高槻市)後期講座 チラシ
- (5) 児島惟謙没後100年記念シンポジウム チラシ
- (6) Kan-Dai3セミナー考古学ウィークエンドセミナー チラシ
- (7) 北大阪ミュージアム・ネットワーク チラシ
- (8) 経済・政治研究所 第178回産業セミナー チラシ

以上

揺らぐ男のライフコース

— 男らしさの社会学的研究 —

文学部 准教授 多賀 太

【概要】

今、男の人生が大きく揺らいでいる。戦後の日本社会においては、終身雇用制・年功序列制のもとで職場組織に忠誠を尽くしながら仕事中心の生活を送る「サラリーマン」モデルが、男性の「標準的」な生き方として人々の間に広く共有されてきた。しかし、近年の社会経済的变化により、「サラリーマン」モデルの正当性は失われつつある。

仕事を生き甲斐としたまま高齢期を迎えた男性の多くが、定年後の「第二の人生」への不適応や熟年離婚などの問題に直面している。「父親の育児参加」が一方で叫ばれながら、男性の長時間労働の実態はほとんど改善されず、多くの父親たちが仕事と育児の間で葛藤を抱えている。男性の扶養責任は依然として重いにもかかわらず、経済のグローバル化を背景とした職場組織のリストラクチャリングは、若い男性が定職に就く機会を減少させるとともに中高年男性の収入低下や失業の機会を増大させている。仕事や経済的な悩みでの男性の自殺も後を絶たない。

こうしたいわば「男性受難」の時代を迎える中で、近年、もはや男性の方が不利であるとの主張や、女性の地位向上に向けた取り組みに反対する動きが目立つようになってきた。しかし、経済力や社会的影響力へのアクセスについて見る限り、現在でも日本社会は圧倒的に男性優位の社会である。多くの男性たちが悩み苦しんでいるからといって、われわれの社会がもはや女性優位の社会になったと考えるのは早計である。また、女性の地位向上を阻むことでそれらの男性たちの問題が解決するとも思えない。

では、こうした男性たちの苦悩をどう理解し、それらにどのように対処していけばよいのだろうか。本発表では、「男が得か、女が得か」といった単純な二元論に与することを避けつつ、「男性の制度化された特権」「男らしさのコスト」「男性内の多様性と不平等」という複数の視点から、男性たちが直面する問題を多角的に読み解いていく。その上で、男性たちが直面する問題の解決へ向けて、われわれの社会が進むべき方向性を提起する。

【プロフィール】

1968年愛媛県生まれ。専門は、教育社会学、ジェンダー論。九州大学大学院教育学研究科で博士（教育学）の学位を取得。90年代前半から、従来女性の問題として見なされがちだった「ジェンダー」（社会的につくられた性別）の問題を男性の問題としてとらえ直す「男性学」の研究に取り組む。昨年度まで福岡県の久留米大学に勤務する傍ら県下自治体の男女共同参画関連審議会委員等を務め、今年度関西大学に赴任。著書に、『男性のジェンダー形成』（単著 2001年）、『男らしさの社会学』（単著 2006年）、『「男らしさ」の現代史』（共著 2006年）など。訳書にR・コンネル『ジェンダー学の最前線』（監訳 2008年）など。仕事と子育てのバランスをとろうとしつつも、つい仕事に傾きがちなのが悩みの種。

都市型水害による浸水時の避難困難度 —避難体験実験による検討—

環境都市工学部 教授 石垣泰輔

【概要】

近年、地球温暖化による気候変動およびヒートアイランド現象などの影響により集中豪雨の発生回数が増加している。特に最近 10 年間での水害を見ると、200～300mm の降雨が 2～6 時間という短時間に集中して降り、下水の排水能力を越えた内水氾濫や堤防から溢れる外水氾濫が発生している。このような短時間記録的降雨が都市域で発生した場合、地下街や地下鉄などの大規模地下空間やビル等の小規模地下空間に浸水し、甚大な人的・物的被害が生ずる。このような都市型水害は、1999 年、2003 年の福岡水害、2000 年の東海水害のみならず、2001 年のソウルなど諸外国でも同様の水害が発生しており、新たな形態の水害として、その防止・軽減対策が検討されている。

このような浸水した地下空間から避難する場合、地下にいる人は、1)水害の発生を察知する、2)地下室のドアを開ける、3)浸水した廊下を歩く、4)水が浸入している階段を上がり地上に避難する、という避難経路をたどることになる。この経路における避難困難度を、実物大の装置による避難体験実験によって京都大学防災研究所と共同研究を行ってきた。その結果、浸水時のドアを押し開けて避難するには、ドア前の水深が 40cmに達するまでに避難する必要があること、廊下および階段を安全に避難するには、流れの速度と水深で表される指標値が 0.125 以下であることが安全避難の条件であるという結果が得られた。この指標は、水理学の分野では、単位幅に作用する水圧と流体力を表す単位幅比力（流速を u 、水深を h とすると、単位幅比力 $=u^2h/g+h^2/2$ で表される）と呼ばれ、流れの単位幅あたりの力の大きさを示している。この 0.125 という値は、重さであらわすと、1 m幅あたり、125kgの力となる。この値が、0.250、つまり、250kgを上回ると避難が困難になる。

これらの値は、成人男性の体験実験結果より得られたものであるが、成人女性や高齢者（高齢者体験セットを用いた結果：70歳相当）の安全避難指標としては、成人男性の8割程度であるという結果が得られている。

ここに示した単位幅比力による安全避難の指標は、地下空間のみではなく地上での避難や水難事故の危険性を表す指標としても適用できるものであり、水に関する被害の防止・軽減に役立つものである。また、浸水のシミュレーションと体験実験によって得られた結果とを組み合わせることにより、避難経路の安全性を検討することができ、避難計画の策定に役立つ。

今後は、一般の方々への周知方法について検討して行く予定である。

【プロフィール】

大阪府出身。1975年京都大学工学部土木工学科卒業後、同大学院に進学。77～81年(株)日建設計に勤務して実務を経験する。81年より京都大学防災研究所助手、助教授を経て、2005年に関西大学に着任。この間、94年に学位を取得、87年にはドイツ連邦共和国カールスルーエ大学にて10ヵ月間、2000年には英国ラフバラ大学にて2ヵ月間、在外研究員として滞在。また、90年には国際水理学会アジア太平洋地区会議論文賞を受賞。専門は水工水理学、防災水工学で、国内外における水害および洪水時の水の流れに関する研究等を行って、水害の防止・軽減策を探っている。現在、「川の個性」と「川の歴史」を“観る、考える、知る”ことに重点を置いた多様な切り口で、水理現象、水災害および河川環境を捉えた教育・研究活動を進めている。近年は、都市域の洪水氾濫や水害、伝統的な水害対策の水工学的検討など、水域の環境と防災・減災に関する研究を行っている。